イベント報告

1秒の永遠

木村佳司

日本学生オリエンテーリング選手権大会　2012年12月2日 静岡県富士市

1秒に笑い、1秒に泣いた。
永遠とも思える瞬間だった。

2012年12月2日（日）静岡県富士市
日本学生オリエンテーリング選手権大会
ロング・ディスタンス競技部門

女子選手権結果

1	稲毛 日菜子	0:48:33	お茶の水2
2	宮川 早穂	0:53:24	立教大学1
3	田中 千晶	0:57:23	お茶の水3
4	芦澤 咲子	1:00:04	相模女子4
5	大河内 恵美	1:01:38	横浜市立3
6	高橋 美誉	1:02:31	岩手大学3

男子選手権結果

1	結城 克哉	1:01:05	東京大学4
2	真保 陽一	1:01:06	東京大学3
3	尾崎 弘和	1:01:14	早稲田大学2
4	福井 直樹	1:05:32	大阪大学3
5	宮西 優太郎	1:06:32	東北大学1
6	堀江 悟	1:06:46	名古屋大学3

1秒差の勝利

このインカレのハイライトは男子選手権の上位3人が秒差で競い合ったこと。結果的に結城克哉（東京大学4年）が後輩の真保陽一（東京大学3年）をわずか1秒でかわして、インカレロング種目の連覇を達成したことだろう。3位の尾崎弘和（早稲田大学2年）も優勝まであと9秒という結果だった。

選手がフィニッシュするたびに会場は大きくどよめき、わずかに舞った初雪もその熱気で溶けていった。

富士山のように

「学生日本一を決める」インカレの目標はシンプルだ。この頂点を目指して全国から学生たちが富士山麓に集まった。男女の選手権クラスに参加する100名強の学生をはじめ、学生一般クラス、チームオフィシャル、一般併設クラス参加者あわせて約900名が集まった。

今回のインカレロング2012開催にあたって、主催者が直面した困難はいまだかつて味わったことのないものだった。しかし力を合わせて、それを乗り越えて行けたのは、インカレの持つ「学生日本一を決める」というシンプルで皆が共有しやすい目標があったからだろう。

男子優勝：結城克哉（東京大学4）
気迫溢れる走りで、1秒差でインカレロングを連覇した。勝利が決まり溢れる涙。

男子2位：真保陽一（東京大学3年）
先輩の結城にあと1秒まで迫る。
フィニッシュと同時に1秒及ばなかったことがアナウンスされ、倒れこむと同時に会場が大きくどよめいた。

男子3位：尾崎弘和（早稲田大学2）
トップとわずか9秒差。紙一重の差だった。

女子優勝：稲毛日菜子（お茶の水女子大学）
昨年の 1 年生のときから、御茶の水女子大学の競技力をぐっと引き上げた稲毛がインカレロング優勝者として君臨した。

女子２位：宮川早穂（立教大学１年）
稲毛に抜かれるまではダントツのタイムをたたき出していた。歴史上、大学 1 年での初めてインカレ優勝者になるかと思われた。

下級生の活躍

女子優勝は 2 年生の稲毛日菜子（御茶の水女子大学）、2 位は宮川早穂（立教大学 1 年）。下級生の活躍が目立った。

宮川早穂は両親ともインカレ入賞経験者というオリエンテーリング競技環境に恵まれ、大学 1 年生ながら競技歴は 10 年以上におよぶ。インカレを見ながら育ち、その舞台に憧れ、ついにその舞台に立ち結果を出した。

昨年度のインカレミドルの優勝者の芦澤咲子（相模女子大学 4 年生）が 4 位に入った以外すべて入賞者は 3 年生以下という結果となった。

男子も、優勝の結城以外はすべて 3 年生以下である。この結果のままでは 4 年生は終われないだろう。2013 年 3 月に開催されるインカレミドルでは最上級生の意地を見せてほしい。

インカレを走る喜び

このインカレロング競技は神奈川県で行われる予定だった「第 2 回あしがら金太郎の里オリエンテーリング大会」に併せて開催される予定だった。

しかし開催日 10 日前になって、この親大会が突然中止されることになってしまった。その時に参加する学生たちに走った動揺は大きいものだったろう。

しかしながらインカレロング 2012 だけは開催地を静岡県富士市に変更し、開催にこぎつけた。急遽テレインを変更してのインカレ開催は主催する側もかなり大変だった。このあたりの大変さは学生にも伝わっていた。

12 月 2 日の大会当日。毎年のインカレ以上に学生の表情が晴れやかだった。選手権クラス、学生一般クラス問わずインカレを楽しんでいるように思えたのは私だけではなかっただろう。

競技を終え、迎えた閉会式は、学生参加者と実行委員会との気持ちが一つになっていた。そこにジェネレーションギャップはなく、ただ皆スポーツが好き、オリエンテーリングが好き・・の気持ちだけがあった。

神奈川県での競技中止から静岡県での競技を実現するまでの 10 日間は、私にとって永遠とも思える瞬間の連続だった。それは学生が勝負にかけた 1 秒とオーバーラップし、記憶に残る大会となった。

（木村佳司）

会場となった富士山こどもの国。出走前に気合を入れる学生たち。
会場は終始選手たちへの熱い声援に包みこまれた。